

Human Rights

平成30年度

全国中学生
人権作文コンテスト

横浜市大会 作文集

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

横浜市教育委員会

平成30年度

全国中学生人権作文コンテスト

横浜市大会作文集

はしがき

昭和二十三年（一九四八年）十二月十日に国際連合総会で世界人権宣言が採択されたことを記念して、毎年十二月四日から十日まで人権週間が設けられています。

これにあわせて、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会と横浜市教育委員会の共催で「全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会」を実施しています。

本コンテストは次代を担う中学生に、人権問題についての作文を書いてもらうことにより、人権尊重の重要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的としています。

本年度は、一三九校、五六、〇四〇編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

コンテストに寄せられた応募作品はいずれも中学生らしいみずみずしい感性に富み、人権問題につい

て、自ら真剣に考えて意見を述べたものばかりで、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。

この作文集は、校内審査を経た六九三編から、一次審査で五八編、二次審査で五十編を選考し、さらに最終審査で最優秀賞、優秀賞に選ばれた二四編を収録したものです。より多くの方々にお読みいただき、身近な生活の中で人権尊重の輪が広がることを願ってやみません。

終わりに、コンテストの実施にあたり多大な御尽力をいただきました、審査に関わられた先生及び多くの関係者の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

平成三十年（二〇一八年）十一月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

（横浜市・横浜人権擁護委員協議会・
横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局）

横浜市教育委員会

【審査講評】

第三十八回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、市内一三九校から五六、〇四〇編の作品を御応募いただき、ありがとうございます。また、参加された各校の先生方におかれましては、熱心に御指導いただき、また審査にあたられましたことに厚く御礼申し上げます。

日ごろの自らの体験を通じて感じたこと、考えたことを人権の視点から見つめ直し、一つの作品としてまとめ上げた中学生の皆さんの意欲と努力に心から敬意を表します。

応募作品のテーマは、いじめなど子どもに関するもののほか、戦争や平和、障害者、環境問題、外国人など幅広い分野から寄せられました。また、今回は、犯罪被害者等や性的指向・性同一性障害に関する問題といった、近年社会的に注目されている分野を取り扱った作品も数多くありました。

作品の多くは、家族や友人、地域の人との日常のふれあいを通じてのふとした気づきや心の動きを素直に表現しており、その感覚の鋭さに、はっとさせられる作品もありました。

中学生の皆さんが人権作文を書くことで培った「人権の視点」を、これからも永く持ち続けてくださ

ることを願っております。

横浜市大会においては、校内審査を経た作品について、市立中学校国語研究会の先生方による一次審査、教育委員会事務局指導主事による二次審査を行い、最終審査で最優秀賞など各賞を決定いたしました。最優秀賞のうち、「奇跡は起こるものではなく、起こすもの」「言葉の暴力、体の暴力」「互いが飛び越えあう壁」「ペイ・フォワード (Pay it forward)」「個性を受け入れる」「私の妹と家族」「待ったなし、多文化共生」「障がい者が生活しやすい社会」を神奈川県大会の優秀賞として推薦いたしましたことを御報告申し上げます。

審査員の皆様には、御多忙の中、審査に御協力いただきましたことに改めて御礼申し上げます。

最後に、この作文集が、中学生のみならず、広く市民の皆様が人権について考えるきっかけとなれば幸いです。

審査委員長 小林 千恵子

(横浜人権擁護委員協議会会長)

目次

はしがき

審査講評

入選者紹介

最優秀賞

●横浜市長賞

奇跡は起こるものではなく、起こすもの

横浜市立中川西中学校

一年

白川

深礼

7

●横浜市教育局賞

言葉の暴力、体の暴力

横浜市立大正中学校

一年

武尾

桃花

10

互いが飛び越えあう壁

横浜市立仲尾台中学校

三年

太田

啓介

13

●横浜人権擁護委員協議会長賞

ペイ・フォワード (Pay it forward)

横浜市立中川中学校

二年

坂

文明

16

個性を受け入れる

横浜市立万騎が原中学校

一年

大橋

美緒

19

●横浜市人権擁護委員長賞

私の妹と家族

横浜市立十日市場中学校……………

二年

友利 心南……………22

待ったなし、多文化共生

横浜市立旭中学校……………

一年

和久津 俊太……………24

障がい者が生活しやすい社会

横浜市立早瀬中学校……………

三年

神谷 綾音……………27

●横浜DeNAベイスターズ賞

グローバル化する社会において

横浜市立みたま台中学校……………

三年

鈴木 樺恋……………30

●横浜F・マリノス賞

居心地の良い場所

横浜市立日吉台中学校……………

一年

原田 素希……………32

●横浜FC賞

変わらない尊厳

横浜市立小田中学校……………

二年

大鍋 真唯……………34

●横浜ビー・コルセアーズ賞

善意のリレー

横浜市立希望が丘中学校……………

一年

栗田 鈴菜……………37

優秀賞

笑顔がもたらす幸せ	横浜市立小山台中学校	二年	相いかわ	珠里	40
戦争から平和への第一歩	横浜市立市場中学校	三年	伊藤いさむ	光翼	42
外の世界へ踏み出すために	横浜市立汲沢中学校	三年	遠藤えんどう	碧あおい	45
いじめ問題の現状について考える	横浜市立藤の木中学校	三年	岡本おかもと	龍二りゅうじ	48
更生という言葉	横浜市立六ツ川中学校	三年	北尾きたお	隼都はやと	51
見えない「努力」	横浜市立日吉台中学校	二年	栗屋くりや	遥はるか	54
つながりの大切さ	横浜市立あざみ野中学校	二年	佐藤さとう	優人ゆうと	57
私達に一番必要な事	横浜市立山内中学校	一年	ソボレフ	真絢まや	59
気付いた先に見えるもの	横浜市立大正中学校	一年	西村にしむら	実祈みのり	61
誰もが気持ちよく過ごせる環境	横浜市立老松中学校	一年	本田ほんだ	愛果あいか	64
互いを尊重する社会	横浜市立義務教育学校霧が丘学園	八年	三橋みつはし	堇令すみれ	66
気付く	横浜市立上郷中学校	三年	森もり	咲月さつき	68

参加校紹介

応募状況



入選者紹介（敬称略）

最優秀賞（横浜市長賞）

白川しらかわ 深礼みのり 奇跡は起こるものではなく、起こすもの …… 横浜市立中川西中学校 一年

最優秀賞（横浜市教育局賞）

武尾たけお 桃花ももか 言葉の暴力、体の暴力 …… 横浜市立大正中学校 一年

太田おおた 啓介けいすけ 互いが飛び越えあう壁 …… 横浜市立仲尾台中学校 三年

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

坂ばん 征明せいめい ペイ・フォワード (Pay it forward) …… 横浜市立中川中学校 二年

大橋おおはし 美緒みお 個性を受け入れる …… 横浜市立万騎が原中学校 一年

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

友利 心南

私の妹と家族

…………… 横浜市立十日市場中学校 二年

和久津俊太

待ったなし、多文化共生

…………… 横浜市立旭中学校 一年

神谷 綾音

障がい者が生活しやすい社会

…………… 横浜市立早渕中学校 三年

最優秀賞（横浜DeNAベ이스ターズ賞）

鈴木 樺恋

グローバル化する社会において

…………… 横浜市立みたち台中学校 三年

最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

原田 素希

居心地の良い場所

…………… 横浜市立日吉台中学校 一年

最優秀賞（横浜FC賞）

大鍋 真唯

変わらない尊厳

…………… 横浜市立小田中学校 二年

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

栗田 鈴菜

善意のリレー

..... 横浜市立希望が丘中学校 一年

優秀賞（氏名五十音順）

相川 珠里

笑顔がもたらす幸せ..... 横浜市立小山台中学校 二年

伊藤 光翼

戦争から平和への第一歩..... 横浜市立市場中学校 三年

遠藤 碧

外の世界へ踏み出すために..... 横浜市立汲沢中学校 三年

岡本 龍二

いじめ問題の現状について考える..... 横浜市立藤の木中学校 三年

北尾 隼都

更生という言葉..... 横浜市立六ツ川中学校 三年

栗屋 遥

見えない「努力」..... 横浜市立日吉台中学校 二年

佐藤 優人

つながりの大切さ..... 横浜市立あざみ野中学校 二年

ソボレフ 眞絢

私達に一番必要な事..... 横浜市立山内中学校 一年

入賞（氏名五十音順）

西村 にしむら 実祈 みのり

気付いた先に見えるもの……………横浜市立大正中学校 一年

本田 ほんだ 愛果 あいか

誰もが気持ちよく過ごせる環境……………横浜市立老松中学校 一年

三橋 みつはし 董令 すみれ

互いを尊重する社会……………横浜市立義務教育学校霧が丘学園 八年

森 もり 咲月 さつき

気付く……………横浜市立上郷中学校 三年

荒川 あらかわ 愛恵 まなえ

耳のかわりはつくれない……………横浜市立六浦中学校 三年

飯田 いいた 樹 みどり

小さな贈り物……………横浜市立山内中学校 三年

石田 いしだ 義晴 よしはる

スポーツと人種……………横浜市立名瀬中学校 三年

磯 いそ 優笑 ゆうみ

一人ひとりが大切な存在……………横浜市立日吉台中学校 一年

岡村 おかむら 実遥 みはる

障害による差別……………横浜市立南中学校 三年

小田 おだ なつめ

未来をつくる……………横浜市立美しが丘中学校 三年

河村 かわむら 美咲 みさき

社会を広げていくには……………横浜市立あかね台中学校 三年

齊藤 柚音

授かりもの……………横浜市立山内中学校 三年

櫻井 詠

私が高齢者に出来ること……………横浜市立市ケ尾中学校 一年

菅原 奈々美

差別が見せる暗い表情……………横浜市立盲特別支援学校 三年

関川 紗月

人権尊重の一步として私たちにできること……………横浜市立末吉中学校 一年

高田 亜門

男女が輝けるためには……………横浜市立本宿中学校 二年

竹並 美智

私の曾祖母……………横浜市立岩井原中学校 二年

立川 亜子

サバを想う……………横浜市立南高等学校附属中学校 二年

田所 立輝

難聴者に対する人権について思う事……………横浜市立西本郷中学校 一年

戸澤 慶

お年寄りへの敬意……………横浜市立山内中学校 三年

生井 紀未

「介護」を考える……………横浜市立富岡中学校 三年

濱上 茉白

忘れられない瞬間……………横浜市立南中学校 一年

濱田 美羽

アイスクリームケーキと原爆の日……………横浜市立宮田中学校 二年

まえかわ
ゆかこ
前川 柚香子

勇氣と強い心を持つて

横浜市立中山中学校

一年

もちつき
望月

みゆ
実祐

人間の個性

横浜市立新羽中学校

三年

よこや
横屋

きょうか
杏佳

やさしさは心の光

……横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校

一年

よしかわ
吉川

あおい
碧衣

わかり合うより、わかち合う

……横浜市立旭中学校

三年

わたなべ
渡邊

あやの
彩乃

認知症の大変さ

……横浜市立森中学校

二年

わたなべ
渡邊

かほ
可帆

気持ちを伝え合う

……横浜市立東永谷中学校

二年

奇跡は起るものではなく、起こすもの

横浜市立中川西中学校 一年

白^{しら}川^{かわ}深^み礼^{のり}

私、本当は生まれてなかったかもしれない。ついこの間、突然母から私が生まれた時の話を聞かされた。あまりの衝撃的な話にしばらく言葉も出なかった。こんなに元気で、こんなに幸せなのに、この世に生まれてなかったかもしれないなんて。そんな事今まで一度も考えたことなかった私は、名前の由来も同時に聞くこととなった。

母の妊娠がわかった直後、私はまだお腹の中で二ヶ月の頃の出来事だった。母は出先で重い病気にかかってしまい、救急病院に運ばれて、すぐ入院するよう勧められた。その時、病院の先生はこう言った。

「お腹のお子さんはあきらめてください。今はお母さんの病気を治すのが先です。元気になったら、またお子さんを望めますから。」最初は何を言われているのかわからなかった。二ヶ月といえば胎児の脳や神経、一番大切な部分で作られる重要な時期。そんな時期に強い薬品を使用すれば、元気に生まれてくることができなかもいれない。もし、生まれたとしても何らかの障害を持って生まれる可能性がとて高い。だからあきらめなさいというのだ。あきらめるといことは、胎児の死を意味すること。でも、治療をしなければ母の体も危ない。生まれるのは八ヶ月後、母体がそれまで元気でいないとお腹の中で赤ちゃんを育てることができないの

だ。

あきらめる決断なんてできなかった母は病院を抜け出した。病気のつらい体で、自分と赤ちゃんの両方を助けてくれる医師がどこかにいないか、他の病院を探し回った。しかし、答えはどこの病院も同じだった。あきらめかけたその時、

「一緒に頑張ってみましょうか。胎児になるべく影響のない薬を使って、治療には時間はかかるかも知れませんが、妊娠を継続していきましょう。」

と、言ってくれる医師が見つかったのだ。その先生は医学書や論文、薬の載った本をひっぱり出してきて、母に病気について詳しく説明してくれた。神様は本当にいるんだな、と初めて思った瞬間だった。

ひと安心した母に新たな問題が起こった。それは家族からの思いがけない大反対だった。母の命の方が大切だからお腹の赤ちゃんはあきらめて、病気の治療に専念して欲しいというものだった。でも、母にはわかっていた。命の問題だけではない。もし、障害を持った子が生まれてきたら、育てるのが大変ではないかということなのだ。母は家族に言った。

「命にどちらが大切とかあるわけじゃないわ。私の体もあきらめていない。この子と一緒に生きたいの。ただ、それだけ。そこに障害があるかなんて、関係ないのよ。」

母は初めから、私を産んで育てることしか考えていなかった。家族の反対を押しきってまで産んでくれた母にも、不安がなかった訳ではない。一度、流産を経験しているのもあり、やっと宿った小さな命を簡単にあきらめきれなかったのだ。今回はきつと大丈夫、とても元気な赤ちゃんが生まれてきてくれる、そんな不思議な自信があったらしい。今思えば母親としての直感だったのかもしれない。

「あなたがお腹から合図をくれたの。ママ、私は大丈夫だから産んでよ。きっと元気に生まれてきて幸せになるわ、ってね。」

母はそう話し終えると、笑った。

あの時、母があきらめていたら私はこの世の中に生まれていない。助けられる病院が見つかってなくても、生まれていない。母が障害に偏見を持っていたとしたら、それでもやっぱり私は生まれていないのだ。

母がつけてくれた名前の通り、私の誕生に力を貸してくださった方々への深いお礼の気持ち、感謝する気持ちを忘れず、奇跡を起こしてくれた母にも心から感謝したい。この奇跡から生まれた命をいつまでも大切にしたい、そしていつか、障害を持つ人も持たない人も関係なく生きていける世の中になりたいと思う。まずは、自身の考え方や障害を持つ人への接し方から変えよう。今の私では大人になって結婚しても、母のような決断はできない。障害があるということは特別なことではなく、生まれもつての人間の一つの個性なのだとして理解すれば、きっと世の中は変わる。

どんな命もたくさんの人の愛情や思いを受けて生まれてきているのだ。そんな大切な命を差別なんて絶対にしてはいけない。この世に生まれて来ていることこそ、人が起こした最大の奇跡なのだから。

いんだよ。だから、もう少し待ってね。ごめんね。」この言葉を聞いて、私は言っではいけないこと、言いたくなかったことを言ってしまったと思った。私は何度も謝った。許してくれないことは分かっていた。だが、今謝らないと絶対後悔すると思った。だから謝った。

それから何分かしら経ったところ、お母さんも落ち着いたが少し体調が悪くなってしまった。とても痛そうだった。辛そうだった。私は、「さらに悪化すると大変だから、ゆっくり休んで。」とも言った。それでもお母さんは、ちゃんと話がしたいと言っていた。私はお母さんの望み通りに話をした。お母さんはこんなことを言っていた。

「お母さんは今、病氣と闘っているの。それは知っているよね？この病氣はもう治りにくくなっているんだ。だからいつ死んじゃうかも分からない。もしかしたら、明日死ぬかもしれない。そんなことも考えながら生活しているんだ。でも、桃花はさつき早く死ねよって言ったよね？そんなことを言われてとても悲しかった。言葉って言ってしまったら相手の心に残ってしまうんだよ。だから、すぐ気がついても取り返しがつかなくなるんだ。だから、今度からは簡単に死ねとか言わないでね？」

お母さんはもういない。しかし、この言葉はいつでも思い出せる。そして言葉とはどんなものなのか改めて思わされる。

言葉とは、一度言っではまえば簡単に取り消すことはできない。だからこそ、感情を抑える必要があるのだ。世界には、暴力がある。大抵は、体の暴力の方がイメージが強いだろう。しかし、私が体験したものは体での暴力ではない。言葉の暴力だ。言葉の暴力は体の暴力よりかなり悲しみなどが強い。この暴力があるから、いじめや差別などが無くならない。だから、体の暴力、言葉の暴力を使用してはいけない。私は、この二

つの暴力を使っていることが多いからこれからは注意することを意識したいと思う。

互いが飛び越えあう壁

横浜市立仲尾台中学校 三年

太田啓介

僕には忘れられない辛く、悔しい経験があります。

「太田が来た！ひかれるぞ、逃げろ」

車椅子の僕を見て、クラスメイトが言いました。本当はぶつかってくるのは相手の方で、僕は止まっていただけなのに、このように言われてしまいます。数日後、またその相手と口論になり、僕が「『ひかれるぞ、逃げろ』』と言ったじゃないか。」と言うと、その相手は「何を言ってるの、そんなこと言ってるんじゃないけど。」と僕の辛い感情のことは気にも留めないような答えが返ってきました。

このような出来事があるたびに、僕は『健常者が上、障害者が下』やはりその壁は壊せないものなのだと痛感します。障害があるからみんなの輪の中に入れないんじゃないか、そう考えたくなくても、そう思ってしまうのです。こういうことを言われるから自分から健常な人々に近づきたくない、次からはそういう相手には近づかないようにしようと思っていました。これが今までの僕の解決方法でした。

しかしこうした僕の考えは今年の夏、大きく変わりました。きっかけは中学校で僕の支援をしてくれる大学生のみなさんから話を聞いたことです。大学生の方々の中には、さまざまな障害のある学生の方がいました。

まず、難聴者の方の話の中では「そもそも障害者と健常者の壁は感じたことはない」ということでした。また、肢体不自由のある方も「障害者と健常者の壁は薄く、すぐに崩れるもので健常者、障害者というごちゃごちゃした所を考えないようにした」と話してくれました。僕の中では健常者と障害者には明確な壁があると思っていたので、とても意外に感じました。他にも、ある健常な大学生の方から「壁を感じているのにどうして太田君には友だちがいるの」と自分に質問されました。その言葉を聞いたときに大きな衝撃を受け、自分の考えは根底から崩れました。自分にも壁を感じない友だちや壁の薄い友だちがいます。その友だちと話している時には壁のことなどあまり深く考えていません。もしかしたら自分自身が障害者と健常者という狭い視野でしか人間関係を考えてこなかったのではないかと感じました。

例えば、僕が鉛筆を落としたときのことです。いつも自分で拾っているのですが車いすに乗ったまま床に落とした物を取ることは大変で、手を伸ばしてやっと拾えるというのが現状です。しかしその姿を見ても、素通りしていく人がほとんどです。車いすに乗っている僕のものに触るのが嫌で取ってくれないのだろうと勝手に思っていました。

しかしその考えは間違っていることに気付く出来事がありました。今回、自分のことを作文に書くためクラスメイトや友だちに、「障害者のことをどう思っているか」と質問してみました。その答えは「障害のある人を手伝いたくても手伝い方が分からない」、「本当に困っているか分からない」、「太田君はがんばりすぎ、もつと人に頼ってもいい」などでした。これは自分にとって思いもしない意外な答えだったのでとても驚くと同時に、疑問や気付きも生まれました。

それは、なぜ声をかけてくれないのかということですが。例えば授業中に班で問題を解くことになったとき

「太田君、大丈夫。問題解けてる？」と班の人が聞いてくれました。そのとき、自分に仲間意識を持つてくれているのだと思い、すごいうれしく感じました。僕は普段から声をかけられることがほとんどないので、ほんの少しでも声をかけてくれるだけで本当に本当にうれしいしありがたい気持ちでいっぱいになります。だからこそまた、僕にも変わらなければいけないことがあります。それはちよつとした勇気を持ち、自分から声をかけることです。そうすることで双方の理解が深まり、視野が広がっていくと、今回のたくさんの人たちとの話し合いの中から感じることができました。

しかし僕は、壁は完全に取り払うことはできないと考えています。障害のある自分でさえ、もっと重度な障害のある人を見ると引いてしまう自分がいるからです。けれども健常者、障害者の両者の壁は低くすることができることに最近気がつきました。どのようにしたらそうなるかはつきりとは分かりません。ただ、話し合つて人それぞれの感じてきたこと、考えてきたことを知ること、視野が広げられると思います。そして、いろいろな考えにふれ、両者の考えが混ざり合い変わっていくことで、『仲間』として受け入れられるのではないでしょう。

「ペイ・フォワード (Pay it forward)」

横浜市立中川中学校 二年

坂^{ばん} 征^{せい} 明^{めい}

昨年の十一月、学校の朝会で「ペイ・フォワード」という言葉を知った。初めて聞いた言葉だった。意味は、「恩送り」だ。誰かから受けた恩を直接その人に返すのではなく、別の人に送ることらしい。僕は、普通は恩は恩をくれた人に返すと思うが、どうして別の人なのかなと思った。

ペイ・フォワードの意味を知った翌月は人権週間があり、学校からの手紙にそのことが書かれてあった。手紙を読んだ母は、

「これ、経験あるよ。」

と言って、話をしてくれた。それは、赤ちゃんの頃の僕が関係していた。僕には、六つ上の兄がいる。僕は早生まれで、兄が小学校一年生になったばかりの頃は生後一ヶ月だった。入学式前は入学準備や予定日より三週間早く生まれた僕の世話で忙しく、入学式後も小学校生活が始まったばかりの兄の世話と生後一ヶ月の僕の世話でとても忙しかったらしい。

行事の日は、僕を家に残すことはできないから僕を連れて出席していた。参観日は教室に入ってから兄を見たかったが、僕が途中で泣き出したら迷惑になると思っ廊下から見たいらしい。母が、

「証明が生まれた時、お兄ちゃんが一年生じゃなかったらそこまで大変じゃなかったかも。」と言った。母にとつて初めての子である兄が小学校一年生だから、兄だけでなく母も小学校のことがよく分かっている。不安だし、小学校に慣れるのに必死な時期だ。兄が二年生以上だったら、もう兄も母も小学校に慣れていて、友達は何人も出来ていて、僕のせいで行事にきちんと参加できなかったとしてもそこまで気にならなかったのではないかということだった。小学校入学前後は、生まれたばかりの子がいない保護者でも大変な時期だ。僕はとても忙しい迷惑な時に生まれてしまったのかなと、少し責められている感じがして嫌な気持ちになった。

母は、学級懇談会の自己紹介では生後一ヶ月の子がいることを話し、PTA活動には出来る範囲で参加したりしていったらしい。すると、母に声をかけて助けてくれる人が出来ていったらしい。中でも、友だちのお母さんには沢山助けてもらったらしい。三人の子のお母さんと、三人目の子が兄と同じクラスだった。ベテランのお母さんだから、とても頼りになって、色々すぐに気が付いてくれたらしい。母が何かを頼む前に声をかけてくれる人で、手伝ってもらったことの一つ一つは小さいことだけど、母にとってはとてもありがたかったことらしい。なので、

「いつもいつもお世話になってばかりですみません。どうお返ししたらいいのか…。」

と母が言ったことがあった。すると、

「何もしなくて大丈夫。私も、沢山の人に手伝ってもらってきたし。その度に『すみません。』って言ってたんだけど、毎回『いいの、いいの。』って言われて。証明君が大きくなったら、今度は坂さんが小さい子を連れた人を見た時にお手伝いしてあげたらいいんじゃない？私には、しなくていいから。私も先輩お母さんから『私には何もしなくていいから、小さい子がいるお母さんを助けてあげて。』って言われたから。」

と、さらつと言われたらしい。あまりにもさらつと言うので、なんてかっこいいのだろうと思つたらしい。

そういう経験をしている母は、本当に友だちのお母さんに言われた通りにやっていると思う。例えば、動物園に行った時、赤ちゃんを抱っこしてベビーカーを持って階段を降りているお母さんに、

「大変ですね。お手伝いしましょうか？」

と声をかけていた。

手紙には、「多くの人と関わることで、人は学び、助けてもらい、周りのために働き、成長していきます」とあつた。母の行動を思い出すと、本当にそうだなと思つた。また、「この人権週間だけでなく、いつもこの心を持つていられたらよいですね」とあつた。母のような行動をする人が多くなれば、小さな子がいる人や、体の不自由な人でも、みんな安心して楽しく毎日過ごせるだろうなと思つた。そして、「君たちの学年としての恩送りは今年先輩たちから伝えられ学んだことを、君たちの後輩にきちんと受け渡していくことです」とあつた。母を見習いきちんと行動し、後輩たちにきちんと受け渡そうと思つた。

ベイ・フォワードの意味を知った時はどうして別の人に恩を？と思つたが、今はとても良いことだと思つている。逆のことをすると、いじめや争いや戦争などが起きるのだと思う。負の連鎖や悪循環などの言葉のようになつていく。だが、世界中の人がベイ・フォワードを意識して行動すれば、正の連鎖や好循環が起きていくと思う。

個性を受け入れる

横浜市立万騎が原中学校 一年

大橋美緒

私は、小学生の頃から化粧やお人形遊びのような女の子らしいことには興味が無く、「かわいい」より「かっこいい」の方が好きでした。そのため、スカートを履く機会が無く、唯一履いたのは、母に勧められて履いた習い事の発表会の一回ぐらいで、普段はズボンを履いていました。それが少し変わっていることなどは、とくに感じていませんでした。

小学校の卒業式。多くの女子がスカートを履くと言っている中、私は、ズボンを選ぶかスカートを選ぶかで迷っていました。悩んでいるうちに、卒業式の服を決める日がきてしまいました。お店でズボンを履いてみると、ビシッと決まっただけで、鏡を見ながら「けっこう私ってかっこいいんじゃない？」と感じ、母も「良いと思うよ」と言ってくれたので、ズボンを選び、卒業式を楽しみにしながら家に帰りました。けれども後で、そのことを伝えると、周りからの反応はいまひとつで、「女の子だからスカートがいいんじゃない？」と言われたこともありました。そのときは、私が人と比べてずれているような感じがして胸が痛みました。卒業式にはズボンを履いて出席し、楽しく卒業式を終える事が出来ました。ところが自分で勝手に「なんでズボンなの」「女の子なんだから…」と言われているような気がしてしまい、その頃から自分は変わっていると思うように

なりました。

また、中学の制服の注文が卒業式と同じ時期にありました。制服は女の子でもズボンを選ぶことができません。私は、目立つのをさけたかったので、スカートを履くと決めていました。けれども、同じ時に買いに来ていた男の子が制服を着ているのを見て、自分も男だったらよかったなと思います、少しスカートが履きづらくなっ
てしまいました。中学校に入学してからは友達も出来、楽しく過ごしていますが、もしあのとき、ズボンを選んでいたらイジメられたり、悪目立ちしていたかもしれません。

私のように自分の個性を出そうとして傷ついてしまった人や、周囲を気にして自分の思いを出せずにがまんしている人が他にもいるかもしれません。私は周りとは比べずに、自分を自分として見てもらいたいと思います。そのためには、一人一人の個性を受け入れ、尊重していく世の中になってほしいと思います。先日、新聞に、女子大が、心は女性である人を受け入れようとしていると書いてありました。このように、小さな事から始めれば良いと思います。

また私たちも、自分を受け入れてもらうためには自分も他の人ときちんと向き合い受け入れることが必要だ
と思います。私はある部活に所属していますが部活には、個性が強い人がたくさんいます。私のように男っぽい人や、中には自分らしさを受け入れてもらえず傷ついた人もいます。個性が強いために衝突する事も、度々
ありますが個性のぶつかり合いを通して、お互いを理解し受け入れ合う事が出来るようになりました。

男だから、女だから、周りがこうだから、と決めつけるのではなく、その人の個性だと思って受け入れるこ
とが大切だと思います。

私はまだ自分を外には出せないけれど、人の個性を受け入れるようにし、自分の個性も受け入れてもらえる

日がくると信じて、同じ思いを持っている人の気持ちをインターネットや新聞で知り、知識を増やし、これからの社会で誰かを支えられるようにしながら、その日を待ちたいと思います。

私の妹と家族

横浜市立十日市場中学校 二年

友^{とも}利^り心^{こころ}南^{みな}

私が小学校一年生のとき、妹が産まれました。とてもうれしかったです。私には弟もいましたが、妹がほしかったのです。一緒におまごをしたり、手をつないで歩いたりなど、楽しみで仕方ありませんでした。

しかし、それはできませんでした。妹は脳に障害があったのです。私は六年生になりました。友達に遊びに誘われたので、家に帰ってすぐに遊びに行こうと思っていたのですが母に妹の面倒を見るように言われ、遊びに行けませんでした。次の日、学校では友達が遊んだときの話で盛り上がっていました。私はずいといけませんでした。私は、妹が病気じゃなければと思っていました。そして次の母の言葉でその気持ちは強くなりました。

「妹も大きくなって、大変だからおばあちゃんの家がある横浜に引っこすことになったからね。」と言われたのです。当時私は福岡に住んでいました。六年間一緒に過ごしてきた友達とも離れなきゃいけないし、中学校では友達とバレーボール部に入ろうねと約束していて、とても楽しみでした。私は、妹が病気をせいで、自分の楽しみがうばわれると思っていました。でも、それは弟も同じでした。妹が生まれたとき弟は四才で、母が一番甘えたい時期なはずでした。幼稚園の送り迎えも母ではありませんでした。しかし弟は泣いたりしません

でした。それは、母の妹つまり、叔母がいてくれたからです。母が妹の入院につきそいでいないときは家事をしてくれたり、たまには私と弟といてあげると妹の面倒を見てくれたりと私達にとって叔母は、もう一人の母のような存在でした。

ある日、私はわがままを言ってしまった。そのときに「妹が病気なせいで」と言ってしまったのです。すると母は一つの動画を見せてくれました。その内容は障害をもった子が実際にはなしていた話を絵にした動画でした。赤ちゃんは産まれてくるときに一つの袋をとって産まれてきます。ある赤ちゃんは真つ黒な袋を見つめました。神様に聞くと、その袋をとると病気になってしまふんだよ。誰かがとらなければいけない袋なのと言われたそうで、それなら私がその袋をもらおうよと袋をもらい産まれてくるらしいです。だから大切に育ててあげて下さい。という動画でした。私は涙が止まりませんでした。一番大変で苦しいのは妹なんだと気づかされました。学校に行つて勉強して遊んで、思いつきり動くという私にとってはあたりまえのことは全て妹がやりたくてもできないことなんだなと思いました。どうして病気のせいでなんて思つたんだろうと後悔しました。それと同時に母や叔母に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

私は今、中学二年になり、できるようになったことがたくさんあります。それは、妹の病気のおかけでもあります。また、横浜でもたくさん友達ができ、バレーボール部に入っています。そして私は将来、福祉に関わる仕事がしたいです。私は妹が大好きです。これからも大変なことがたくさんあると思うけれど家族で乗りこえていきたいです。

待ったなし、多文化共生

横浜市立旭中学校 一年

和久津 俊太

照りつける太陽が助手席の私に容赦なく襲いかかる。暑い。今年の夏は普通じゃない。私は父に「コンビニで車を止めて。」と頼んだ。

そこは知らない街だった。駐車場に降り立つと、熱風に揺らめく景色の中に不思議な光景が広がっていた。コンビニの入り口前には中学生くらいの大勢の男の子達が地面にしゃがみ込んでいる。日本人らしき人もいれば、浅黒い肌濃いめの顔立ちで明らかに日本人とは違う人もいる。大声で飛び交う言葉は日本語だったり私の知らない言語だったりのごちゃ混ぜだが、楽しそうに話しているから通じ合っているのだろう。辺りを見回すと、道行く人も外国風の顔立ちの人が多い。飲み物を買おうとコンビニに入ると、レジの店員も外国の人だった。私は狐につままれたような気持ちだった。ここは日本なのか。暑さで幻を見ているのか。コンビニの外に出てもう一度振り返り、街を眺めてみる。さつきと同じだ。焼けたアスファルトの熱に包まれたその光景は、まるで夏の日の蜃気楼のように現実と夢の境を私の心の中で行ったり来たりした。

帰宅後、私は立ち寄ったその街について調べてみた。すると、そこは横浜市と大和市にまたがる「いちよう団地」の近くの街であるとわかった。その団地は、約四十年前、難民を受け入れる「大和定住センター」が近

くに開設されたことからだんだんと外国人入居者が増えていき、今では約二割が外国籍の住民だという。また、団地の子供達が通う小学校は約半数が外国に開わりのある児童だそう。

そんな街が近くにあるなんて知らなかった。道理で街中に外国人風の人が多かったわけだ。後日、私はその経験を英会話のレッスンを受けている先生に話した。先生から返ってきた答えは意外なものだった。「それは不思議でも珍しいことでもないのよ。移民の多い国では外国籍の人々が一緒に暮らすのは普通よ。」東欧出身の先生はヨーロッパ各地を転々とし、北米やアジアにも住んだことがある。今は日本人男性と結婚し、日本に住んでいるのだ。彼女にとって国境や国籍など何の意味もなく、住みたいところに住み、その地域社会の一員としてコミュニティに参加する。だから国籍を理由に異端視されると悲しくなるのだという。「外国人だからって珍しい目で見ないで。同じコミュニティのメンバーなのよ。」と先生は言った。私は目からうろこが落ちる思いだった。街は日本人だけのものではない。住んでいる人達みんなのものだという視点が私には欠けていた。外国籍の住民は、珍しいお客さんではない。すべての人たちの生活まるごと、それこそが地域社会であるべきなのだ。

たしかに、いちよう団地に限らず私の住む街でも外国の人を見かけることが多くなった。近所にも外国姓の表札がかかった家がちらほらある。これからはますます増えていくのかもしれない。そんな彼らと一緒に街づくりをしていくにはどうしたらいいのだろう。そのヒントはいちよう団地自治会の長年の取組の中にあつた。いちよう団地では、文化の違いから外国籍住民が深夜まで庭でカラオケをするなどのトラブルが絶えなかったが、多言語で暮らし方のルールのチラシを作るなどの粘り強い自治会活動のおかげで改善されていった。そして最も効果があつたのは、住民参加のお祭りを開くことで、人々の交流が深まり、徐々にコミュニティの輪が

広がっていったことだ。何よりも大切なのは、国籍に関係なく共に生きていこうとする人々の心なのだと思う。それには、私たち若い世代が積極的に心の壁を取り払い、率先して外国籍の人とともに地域づくりをしていかなくはないけないと思う。地域の夏祭りなどの行事や町内会のボランティア活動に中学生が率先して参加し、外国籍の住民と一緒に汗を流し、話す機会を多く持つことで、お互いに分かり合い、理解が深まる。それが共に生きる地域コミュニティづくりの原動力になるのではないだろうか。

様々な文化的背景を持つ人々が共に生きていくことを「多文化共生」と言うそう。互いの文化の独自性を尊重しつつ協調して共に生きることは、ボーダーレス化が進む今、当たり前のことだ。二年後には東京オリンピックが開かれ、神奈川県でも競技が行われる。横浜が、神奈川が、そして日本がどんな国なのか、世界から注目され、そして評価されるに違いない。その時、「日本はすべての人が暮らしやすい国ですよ。」と胸を張って言いたい。多文化共生は待ったなしなのだ。そのためには中学生の私たちが、今できることをどんどん探して、多文化共生の地域づくりの輪を広げていきたい。コンビニの前にいた男の子達は国籍も言語も様々で、でも、とても和気あいあいとして自然体だった。そんな理想の地域社会の姿が、夏の日の蜃気楼などではなく、日本中に広がってほしいと思う。

障がい者が生活しやすい社会

横浜市立早渕中学校 三年

神谷綾音

みんなの口をジッと見つめる。しばらくすると、みんなの肩が微妙に上がり、口が開く。

「今だっ!!」

私は口を開ける。でも、自分の喉は動かない。それに対して口はみんなの口の形と同じように動いていく。隣の子がこちらをチラチラ見てくる。「あー。まただ。」悔しさの粒が目の奥にたまる。そして、私は心の奥底から叫ぶ。誰かに。「みんなと同じように歌いたいー音楽を嫌いになんかなりたくない!」

音楽の授業。それは、私が苦手な科目だ。なぜなら、私は生まれつき聴覚障がいを持っているからだ。聴覚障がいの中でも私は、重度難聴だ。いつも人工内耳と補聴器を耳につけている。しかし、それをつけたからといって、みんなと同じように聞こえるようになるわけでもなく、リズムや音程が分かるようになるわけでもない。だから、私の歌声はリズムも音程も全く合っていないメチャクチャなものなのだ。みんなに迷惑をかけたことなく、歌う時はいつも口バクになってしまう。しかし、それが隣の人にばれてしまい、チラチラと見られることがしばしばあるのが辛い。

私が困っているのは、それだけではない。本当は人と話すことが大好きで明るい性格だ。一対一で会話をす

る時は、聞こえを補うために口を大きく開けて話してもらえば、口の形から話の内容を想像することができ
る。しかし、大勢での会話はあちこちで話すため、今誰が話しているのか分からなくなり、口の形を読めず、
内容を理解することがとても難しくなるのだ。よって、会話の中に入れず、「おとなしい子だ。」と思われてし
まうのだ。それが、私が話かけても薄い反応しかない子がいる原因につながる。私は考えている。本当は私
も大勢の仲間達と楽しく話したり、笑い合ったりしたいのだ。でも、何を話しているのか分からないので、み
んなが笑っている時はなぜ笑っているのか分からないまま、みんなに合わせて笑っている私がいる。自分だけ
が内容を理解出来ないと思うと、いつも辛く悲しい気持ちになる。

二〇一六年四月一日より施行された、「障がい者差別解消法」を知っているだろうか。これは、障がいの有
無によって分け隔てられることなく、互いに尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障がいを理由とす
る差別の解消を推進することを目的としている。この法律が施行された翌年にアンケートをとったところ、
「障がい者差別解消法を知っている人」は二十一・九%、「知らない人」は七十七・二%にも上がったそうだ。
また、「障がいのある人に対しての差別や偏見がある」と思う人は八十三・九%もいたそうだ。

私も、普段の生活で障がい者差別解消法が社会にあまり浸透していないのでは…と感じることがある。最近
でも、娯楽施設で「付き添いのない障がい者の方の入場は、安全確保に不安がある」と、聴覚障がい者が耳が
聞こえないことを理由に入館を断られたという出来事があった。障がい者差別解消法の目的と真逆のことを
やっているともいえる。また、聴覚障がい者は音楽のリズムや音程が分からないため、音楽の評価の基準が皆
と同じでは、圧倒的に不利になってしまう。それは不公平だと感じている。努力してもどうにかなるものでは
ないからだ。だから、障がいを持って人とは別の基準を作って欲しいと私は思う。

逆に、浸透していると思うこともある。私は以前、英語のリスニングでテロップ表示の特別措置の対応をしてもらったことがある。本来にありがたかったが、特別措置対応可能日が一日のみであるため、都合がつかない場合、英検を受けることが出来なくなってしまうのだ。だから、特別措置が受けられる日を増やして欲しいと願っている。

私は、来春には受験を控えている。受験したい高校全てが英語のリスニングで配慮してくれるだろうか。私が打診したり、受験したりすることで、そういう子がいると気付いて、対応する学校が増えることを望んでいる。

障がい者差別を解消するために、私の立場で出来ること―。多くの人に聴覚障がいのことをもつと積極的に伝えることだ。人は本能的に見慣れないものに不安を感じ、近づかないようにする。どのように接すれば良いか分からず、声を掛けられない人もいると思う。だから、自分は何に困り、どうすれば助かるのかをアピールしていこうと思う。

私の夢は、デフリンピックのバドミントン選手になることだ。「デフリンピック」とは、まだまだ認知度は低い、聴覚障がいを持つ人々のためのオリンピックのことだ。選出されて私が目立つことにより、障がいのある人がますます活躍しているのが当たり前前の社会になって欲しい。そのために、日々努力を重ねていこうと思う。

グローバル化する社会において

横浜市立みたま台中学校 三年

鈴木 木 樺 恋

私は純日本人ではありません。中国人の母と日本人の父をもつハーフです。そのことに私は誇りをもっています。普段は日本語を話し日本に住むただの日本人です。周りの人も他の人と変わらず私に接してくれます。でも、何度か私は「中国人って嫌いなんだよね」とか「中国の人っていじわるなんでしょ？」と言われたことがあります。その度に私は怒り、というより悲しい気持ちになります。どうして中国に行き、現地の人と話したことはない人がそういう風に言うのだろう。何故、わざわざ私に言うのだろう。

中国人に対して嫌悪感を抱く人は少なくないと思います。なぜならテレビなどで中国人が日本の模倣をしていたり、悪いことをしているとかが報道されているからです。報道することは悪くありません。実際にそういう行為をしている中国人はいるからです。しかし、これで中国人全員が悪い人だと思わないでほしいのです。一部の、悪い人だけを映し出した報道が全てだと思わないでほしい。思いこみによる行動は、自分でも気づかぬ内に人の人権を踏みにじり、傷つけるときがあります。もし、私ではなく本当の中国人にあの言葉がかけられたらどうなるでしょうか。きっと私の何倍も何倍も悲しむでしょう。自分の国を、家族を、自らを否定されたのですから。中国には限りません。どの国だってそうです。

私は、あの国がどうしても嫌い、という考えはあつて良いと思います。全てを認めるのはとても難しいことだと思ふからです。でもその嫌いな気持ちを分別なく表に出さないでほしいのです。私が平和のために、人権の尊重のために必要なことは、全てを理解し向かい合うことではなく、自分の考えと違うものに直面したとき、拒絶せず一度自分のなかに受けとめて様々な視点から考えてみるのだと思ひます。それでやっぱり嫌いだという結論がでて、良いと私は思ひます。ただし、それを周りの人に押しつけずに、一つの考え方として捉え、自分のなかに留める強い意志が必要だと思ひます。

グローバル化が急速に進む現代、以前よりも私たちは様々な人に会うことになるでしょう。その中にはとても相性の良い人がいるだろうし、反対にどうしても合わない人もいると思ひます。そのどうしても合わない人との接し方を考えたとき、自分の考えをよく見つめ直し、お互いに尊重しあえるような関係を築ける力が現代の私たちには必要です。たとえ認めあうことができなくても、個人の個性や人権を尊重し、誰も自分の国、育ち、宗教、人種、性別にコンプレックスを抱かず、のびのびと生活できる社会になることを私は望みます。

居心地の良い場所

横浜市立日吉台中学校 一年

原^{はら} 田^だ 素^{もと} 希^き

多くの趣味は将棋で、千駄ヶ谷の将棋会館道場に月二回は行っている。道場は広くて、将棋好きの人がいろいろな場所から集まってくる。男の人、女の人、幼稚園児からお年寄り、障害を持つ人や外国人もいる。対戦相手は手合い係が決めるので自分では決めることができない。

将棋会館の道場はとても居心地が良い。道場では好きな将棋を思う存分指せるからではあるがそれだけではないと思う。考えてみるとあることに気がついた。それは対戦相手がぼくのことを尊重してくれる、ということだ。

将棋は礼に始まり礼に終わる、と言われていた。対局を始める時は「よろしくお願いします。」とあいさつをする。負けた時は「負けました。」と言って、頭を下げる。最後は二人で「ありがとうございました。」と言う。その後感想戦といって、悪かった点を指摘し合うのだがぼくはそれを相手への礼儀だと思っていていねいに行くようにしている。

道場ではみんな平等だ。小学校低学年の子どもとおじいさんがそこら中で普通に対局をしている。おじいさんは年下だからといって子どもに対して見下すような態度は取らない。もちろん子どもも失礼がないようにマ

ナーを守る。ぼくはこの「相手を尊重する」ということに居心地の良さを感じるのだと思う。

ぼくが生きている社会では自分の権利を主張しがちだ。自分を基準として、自分と違っていたり、弱い立場の人などをいじめていたり差別をしてしまっている。でもそれは間違ったことだ。もし自分を尊重してもらいたいのなら、まず相手を尊重することが大切だと思う。「相手を尊重する。」という気持ちがあれば世界中いじめや争いごとはなくなるはずだ。

ぼくは将棋がもっと強くなりたいと思っている。道場にもできるだけ行きたいと思っている。これからもいろいろな人と対局するであろう。将棋以外にも相手を尊重する気持ちを忘れないでいたい。

そうすれば世界中どこでも、誰にとっても居心地の良い場所が増えていくはずだ。

変わらない尊厳

横浜市立小田田中学校 二年

大^{おお}鍋^{なべ}真^ま唯^い

「おばあちゃんの様子がなんだかおかしい気がする。」母が不安そうな表情で私にそう告げたのは、七年前の秋のことだった。

私は六歳まで兵庫県に住んでいたが、自宅が母の実家の近所だったこともあり、小さい頃から祖母にはとても可愛がってもらっていた。祖母は、若くして病に倒れ、体の不自由になった祖父の介護をしながら仕事もしており、今思えば大変な生活だったと思うが、いつも明るく元気で、私はそんな祖母が大好きだった。母が祖母の異変に気づいた日から二ヶ月経った冬休み初日、母は私と弟を連れて、祖父母の住む兵庫県の実家へ急ぎ帰った。祖母の顔をひと目見た瞬間、「いつものおばあちゃんじゃない。」子供心にそう思ったのを憶えている。いつも綺麗にお化粧をしてオシャレだった祖母の姿はなく、出迎えてくれたのは化粧気のないちぐはぐな服を着た祖母だった。家の中は物が散乱し、冷蔵庫にはかまぼこが何十個も入っていた。母は慌てて祖母を病院へ連れて行った。検査の結果、母の不安の中、祖母は認知症と診断された。祖母はまだ六十二歳だった。

祖母が認知症と診断されてまもなく、入院中だった祖父が急変し、突然亡くなった。これを機に、祖母を我が家に引き取り、介護することとなった。祖母が患っている認知症は「前頭側頭型認知症」というもので、主

な症状は、他人への配慮をなくし、自分勝手な行動をとるといった性格の変化だそうで、祖母も別の人格に変わってしまったかのように、私のお皿にのっっているおかずを食べたり、弟が大切にしていたおもちゃを壊してしまったりした。優しかった祖母のあまりの豹変ぶりに戸惑いや哀しみ、怒りが湧き、祖母を受け入れることができなかった。祖母の勝手な行動にストレスを感じながら過ごしていたある日、祖母の介護を支援してくれていた当時のケアマネージャーが私たち家族にこう言った。「おばあちゃんの問題行動はおばあちゃんの意志ではなく、病気がさせていること。病気になる前のおばあちゃんを思い出して。」

その言葉を聞いて、目が覚める思いだった。この日を境に、認知症である祖母を受け入れることができるようになった。

デイサービスやショートステイなどの介護サービスを利用しながらの在宅介護を経て、祖母は現在、特別養護老人ホームでお世話になっている。この老人ホームのスタッフさんはどの方も本当に熱意と思いやりをもって介護してくださり、母はいつも良い施設に入って幸せと言っている。テレビでときおり、認知症の老人に暴言を吐いたり、暴力をふるったといったニュースが流れてくることがあるが、祖母のいる老人ホームでは、スタッフさん全員が症状に関係なく入所者一人ひとりの尊厳を守ってお世話してくださっている。今では話すことも歩くこともできなくなった祖母に敬語で優しく語りかけてくださるスタッフさんには、感謝の気持ちでいっぱいだ。

高齢化社会を上回る「超高齢化社会」といわれる現代において、介護の問題は他人事ではなく、誰もが遅かれ早かれ必ず直面することだ。実際我が家にも、介護の日々は突然やってきた。祖母の介護を通じて私が学んだことは「感謝の気持ち」と「人を思いやる心」だ。祖母の介護にあたり、助けてくださった多くの人々への

感謝の気持ちはもちろん、病気になるまでたくさん私を可愛がってくれた祖母への感謝の気持ちは忘れてはならない。認知症は、人間の機能をうばっていく残酷な病気だが、認知症患者が人間でなくなるわけではない。認知症だけでなく、病気や加齢によって体が不自由になった人の尊厳を無視するようなことがあっては、決してならないと思う。人間には必ず老いが訪れ、人の力を借りなければならぬ日が来る。私たちはみな誰もが、高齢者の方々にかつて多くの助けを借りてここまできたはずだ。今度は私たちが高齢者の方々の尊厳を守り、思いやりをもって手助けをする……そんな人になりたいと心から思う。

善意のリレー

横浜市立希望が丘中学校 一年

栗^{くり}田^た鈴^{すず}菜^な

「あ、危ない、どうしよう。」そう思った数秒後には、すでにそのおばあさんはそばにいたご夫婦に手を引かれて遮断機の外に助け出されていた。踏切を渡ろうとしていたおばあさんは渡りきる前に遮断機が下りてしまい、身動きが取れなくなってしまったのだ。その時、踏切の反対側にいた私は何かをしたいと思いつつも、どうしたらよいのかわからずただ成り行きを見守っていた。

最近、スマホやゲーム、インターネットなど、ツールを使つての人との関わりが多くなり、面と向かつて人と積極的に関わりとうとする人が少なくなつてきてはいないだろうか。それと同時に、誰かが言った意見に周りが簡単に「いいね。」と同調し、同調しない人を受け入れないような空気がないだろうか。つまり、大多数に乗り切れない人達にとつて、生きづらい世の中になつていくような気がするのだ。

スーパールのレジでお金を出すのに長い時間かかっている老人に舌打ちをする人、電車の優先席の前に老人が乗つてきても知らん顔をしてスマホをいじっている若者、電車の中で泣いている赤ちゃんに怒鳴るおじさん。あげればきりが無いが、これらはすべて、これまで実際に私が見たことがある光景である。新聞の投書などでよくこのような内容の記事を目にすることはあったが、現実になんかといった光景を目にすると、なんだかとても

やるせない気持ちがした。

そんな風を感じていた私の目の前で、そのご夫婦は踏切から出られずに困っていたおばあさんを、とても自然にさっと助けているのを見て本当に「すごいな。」と感動した。実は私も困っている人がいたら、自分のできることをまず一つ行動に移そう、そう強く思っていた矢先の出来事だった。色々と考えはしても、どうしても一歩踏み出せないことが多い私が強くそう思ったのには、昨年のこんな経験があった。

中学校で運動会を見て帰る途中、私は熱中症で突然道路にバタリと倒れた。驚いた両親は私を近くの公園に運びベンチに寝かせた。慌てている両親に、見知らぬ男の子が父親と一緒に冷たい飲み物を買ってもってきてくれた。また、公園で遊んでいた女の子の母親は持っていた子どもに着替えを水道でジャブジャブとぬらして、「これで体を冷やしてあげて下さい。」と渡して来てくれたのだ。もちろん私は後で聞いて知ったことだったが、両親は何度も何度もその話をしては、「本当にあの時は助かったよ。急なことで気が動転していたけれど、みんなの親切な気持ちがあるのすごい力になって冷静に行動することができたよ。」と、とても感謝していた。私はその時の話を聞くといつもとても幸せな気持ちになる。

周りに困っている人がいたら、状況を見て自分にできることを判断し、さっと行動にうつす。これは簡単なことと思えて、結構難しいことだと私は思う。なぜなら常日頃から周りにしっかりと関心を持ち、相手の気持ちにより添った行動をしなければならないと思うからだ。でも、どんな小さなことでもいい、一人一人が自分のできることから行動にうつしていけば、その一つ一つの善意がどんどんと人から人へとつながり、大きく広がっていくと思うのだ。そして、もっともっと住み良い世の中になっていくのではないだろうか。

もっと周りに関心を持つと、色々な人と関わり合う。まずは「知る」という努力をしなければ、正しい判断は

できないし、自分は何をするべきかも分からない。でも、自分がやったほんの小さなことが人の心を少しでも温かい気持ちにできるとしたら、それはどんなに幸せなことだろうか。

その日の帰り道、私は遮断機の前で自分ができたであろう行動を色々と考え続けていた。次への行動につなげるために。

笑顔がもたらす幸せ

横浜市立小山台中学校 二年

相川珠里

私には一歳年下の、男の子のほとこがいます。名前はたつくん。小さい頃にインフルエンザから髄膜炎を起こし、右半身が不自由になりました。髄膜炎とは、脳を包んでいる髄膜というところに炎症を起こす病気で、症状は、最初は風邪のように発熱、頭痛、嘔吐などで、二日間くらいで進行し、意識障害やけいれんが現れます。この病気は、○歳から四歳の乳幼児と十代後半の発症数が多いことがわかっています。全国十道県で行った調査では、五歳未満の小児十万人あたりの髄膜炎の発症数が二〇〇八年では約八人だったのに、ワクチンの定期接種により、二〇一四年には○人になりました。

普段は、車イスに乗って移動しています。だから、たつくんはみんなと一緒に外でのごっこもできないし、ゲーム機で遊ぶこともできません。それがたつくんにとつてのあたりまえです。

親族の新年会、私は毎年小さいはとこ達のお世話をしています。その日もたつくんと、はとこ二人と一緒に二階の子ども部屋で、ミニカーやおままごとなどをして遊んでいます。その時、二歳の男の子がミニカーを走らせながら、楽しそうに階段をすらすら下りていってしまいました。そして他の子までつられて一階まで行ってしまいました。私はおじいちゃん、おばあちゃん達がいたり、大人が火を使ったりしているので、小さ

な子どもが行くと危ないと思い、連れ戻そうと、たつくんに「ちょっと待ってて。」と言って、一階に行きました。しかしはとこ達は「二階で遊ぼう。」と言っても、いうことをきいてくれません。つかまえようとしても、楽しそうに逃げ回ってしまいました。ふとたつくんのことが気になってふり返ると、二階から楽しそうな優しい笑顔でこちらを見つめていました。その時私は、みんなと一緒にすることができなくても、たつくんがいつも笑顔でいられるのは、とても心が強いからだと思います。もし私が同じように歩けなかったら、たつくんのようにいつも笑顔ではいられないでしょう。私は、バスケットボール部に所属しているのですが、今年の五月、練習中に指を骨折してしまい、プレイができなくなっていました。その時私は、プレイができない悔しさで練習に行きたくなくなるほど、落ちこんでしまいました。たつくんの笑顔は強さの証だと思っています。

私は今まで、たつくんのできないところだけを見て、たつくんのことをかわいそうだと思っていました。でもそれが間違っていたと思えました。たつくんはみんなと一緒にすることができなくても、いつも笑顔でいられる強い心を持っています。それがたつくんの個性で私が尊敬するところです。

私は、たつくんから、人は一人ひとり素晴らしい個性を持っているということを改めて学びました。これからは、相手の素晴らしい個性を見つけて、尊重できるような人になりたいです。

戦争から平和への第一歩

横浜市立市場中学校 三年

伊藤 藤光翼

今まで人々は第二次世界大戦や湾岸戦争、アメリカ九・一一のテロなど、さまざまな戦争を起こしてきました。そして今もなお世界では不穏な雰囲気があります。僕は実際に戦争を経験をした事がないので、修学旅行やテレビで知識を深めました。調べるにつれて戦争についてもっと詳しく知りたい気持ちが増し、実際に戦地へ赴いた人と戦地へは行かずとも、その時代を生きた人と直接話がしたくなりました。そしてどのようにしたら世界中の人々が平和に暮らす事ができるのか、考えました。

今年戦争から七十三年です。刻一刻と戦争の記憶を持つ人が高齢化し、直接体験談を聞く機会が少なくなっています。僕の祖父の世代は終戦頃の生まれなので、体験の記憶がなく、なにも聞くことができませんでした。僕は焦りました。そのような人がもっと簡単に見つかると思ったからです。しかし、このまま諦めるのは悔しいし、今探さなければより一層聞くチャンスがなくなってしまうと思いました。家族の協力により幸運にも祖母の紹介でシベリアに抑留された、Kさんの話を聞くことができました。

Kさんは十八歳の頃、家が貧しかったので進路先を陸軍憲兵学校にしたそうです。僕も今受験生で進路を決めている最中ですが、選択肢の中に軍事学校があるなんて信じられません。とても勇気のいる決断だったと思

います。当時憲兵になることはとても名誉で誇れることだったようですが、僕は複雑な気持ちになりました。その後、Kさんは満州に渡りましたが日本の敗戦が決まり、シベリアに四年半ほど戦犯として抑留されてしまいました。そこでは強制的に過酷な労働を命じられ、人権を無視されたと言っていました。マイナス三〇度にもなる極寒地で十分な食事も与えられず、栄養失調に陥る人が続出したそうです。鼻の頭が真っ赤になるほど凍えて、友人と肌をこすり合わせて暖をとったというエピソードがとても印象に残り、胸がしめつけられました。寒ければ暖房をつけ、お腹がすけばコンビニなどで好きな物をすぐに買って食べられるのが当たり前の僕は、とても恵まれているということを再認識しました。死ぬか生きるかの究極の状況の中からよくぞ生還できたなと涙があふれそうになりました。

七十三年前の記憶を昨日のことに語ってくれたKさんは現在認知症を患っており、普段の生活もままならない状態ですがこんなにも詳細に当時のことを語れるのは、辛かった記憶が心に強く刻まれているからだと思います。

去年の終戦記念日に戦争の下キュメンタリー番組を見て、昔日本が外国へ行なった無慈悲な攻撃を知り、僕の心を濁らせました。そして一九四五年に広島と長崎に原爆が落とされて日本は終戦を迎えました。原爆は広島と長崎市民を無差別に襲い、一瞬にして多くの命を奪いました。それを聞いて、もっと違う解決方法はないのか疑問を持ちました。話し合いはできなかったのだらうかと思ったりもしました。

そして僕は修学旅行で広島を訪問しました。今までそれはテレビ越しでしか見たことがありませんでしたが、実際に目の当たりにしてみてもその残忍さに圧倒されました。この光景は広島、長崎でしか見られません。なぜなら原爆の被害をうけたのは世界でたった一つ、日本だけだからです。

現在原爆（核）を持つ国は多数あり、人々はいつも死の淵を歩いています。そこから脱するため、日本が核廃絶の先端に立っていくべきだと考えます。また、戦争や平和についての知識を深め、色々な形で他の人に伝えていくことが戦争から平和への第一歩ではないでしょうか。僕にできることはKさんの話を無駄にせず、後世へ伝えることだと思います。

まだまだ色々な方法はあると思いますが、この世に必要な戦争を一人だけでなく世界中のみんなでも無くそうとする意識が必要です。まずは身近な人を思いやり、さらにその人に関わる周囲の人たちのことにも思いを馳せてみることから僕は第一歩を踏み出そうと思います。

外の世界へ踏み出すために

横浜市立汲沢中学校 三年

遠藤

碧

私の母について書こうと思います。私の母は週に五日、フルタイムで仕事をしています。小さい頃から、父は出張も多く留守がちだったうえ、今は海外赴任中のため、働きながら私たち兄弟を育て、家事もこなすパワフルな人です。私も弟もそんな母に頼りきりです。

いつもは明るく元気な母が、

「ちよつと話しておきたいことがあるんだけど…。」

と、私と弟を呼んだのは、ちょうど一年前の夏のことです。母から聞かされたのは、「弾性線維性仮性黄色腫」という、聞きなれない名前の病気でした。PXEと呼ばれるこの病気は、約十万人〜三十万人に一人という頻度で発生するとても稀な病気で、治療法が確立されていない難病に指定されています。体の弾性線維と呼ばれる組織が変性することで、皮膚や目、血管に障害が出るのだそうで、年齢とともに徐々に進行していく病気で、幸い母の病状は軽く、今のところ日常生活に支障はありません。けれどこれから症状が進むと、視力を失う可能性も少なくなっていくのです。

これを聞いて、私は混乱しました。

「目が見えなくなるってどういうこと？私は家事もほとんどできないし、父もいない状態で、いったいどうしたらいいの？私のことも見えなくなってしまうの？」

日常が大きく変わってしまうことに、ただ、とてつもない不安を感じました。自分の事しか考えられませんでした。今思うと、病気になった本人である母の方が、余程大きな不安を抱えていたのではないかと思えます。

光のない世界を少しだけ想像してみました。まずは一番身近な家の中で、私は目をつむって歩いてみました。一步一步足元を探りながら前に進むのですが、視覚からの情報がないと、今足に触れているものが何なのかすらわかりません。またいで進もうと片足を上げると、とたんに恐怖に襲われます。今上げた足をどこに下ろしたらいいのかわからないのです。奈落の底に落ちるとい言葉がありますが、まさに自分が深い暗闇に落ちてしまうような、不思議な感覚でした。

では、家の外に出てみるとどうでしょう。点字ブロックの上に自転車が停めてあつて、視覚障害者の生活の妨げになっている、というような話をしばしば耳にします。いくら注意喚起をしても、なかなかなくならないのが現状です。みんながもつと気を付けるべきだと私は思います。けれど、その一方で、私自身はきちんと配慮ができていのでしょうか。混雑する駅の構内で、無意識に点字ブロックをふさいでしまっていることもあるかもしれません。友達との会話やスマートフォンに夢中で、目の前から歩いてきた白杖を持った視覚障害者を、慌ててよけたという経験もあります。目の見えない人にとって、外の世界は、私たちが想像する以上に危険が多いのです。

先日映画のプロモーションで来日した車いすバスケのマリオ・モーラン選手が、こうお話しされていました。

「健常者の人も障害者の人にも共通して言えることですが、とにかく家にこもらないでほしい。どんな状況でも生きていることを感じてほしいし、人生を楽しむことが大切。」

本当にその通りだと思います。家の外に出て、社会とのつながりを持つことは、私たちが人間らしく生きる上で欠かせない営みです。学校で様々なことを学んだり、家族や友人と買い物に出かけたり、やりがいのある仕事に従事したり。外の世界に踏み出すことで、私たちの人生は今よりもっと豊かなものになるはずです。けれど障害を持った方たちにとってのその一歩は、もしかしたらものすごく勇気の必要な一歩なのかもしれません。

私は、母の病気に触れ、健常者も障害者も互いに生き生きと暮らせる社会について考えるようになりました。私たちのほんの少しの不注意が、障害を持った方たちにとっての脅威になり得る一方で、ほんの少しの思いやりが、彼らの一歩を踏み出す力にもなり得るのではないのでしょうか。もしも危険を感じて外に出ることをためらったり、健常者の心無い視線に悲しい思いをした経験から、外に出ることをやめたしまった障害者がいるとしたら、それこそが、ひどい人権侵害だと思えます。

母の病気が進行し、いつかその目が光を失ったとき、それでも安心して外へ出られる社会であって欲しいです。だからどうか一度、目をつむって歩いてみてください。相手の立場に立って行動してみると、その人のために何ができるのかが見えてくるはずですよ。

いじめ問題の現状について考える

横浜市立藤の木中学校 三年

岡 おか 本 もと 龍 りゅう 二 じ

昨今、いじめに関するニュースが絶えない。ニュースを見る度に私の心が痛む。特にいじめによって、自ら命を絶つという選択をせざるを得なかった小、中、高生の報道を見る度深く考えさせられる。いじめによる小、中、高生の自殺者数は、ここ五年間で平均して年間三二〇人近くに上る。なぜそのような悲しい出来事が起こってしまうのだろうか。

私の学校では毎年、「いじめに関するアンケート・話し合い」が行われる。今年の話し合いでは「いじめている人」「いじめられている人」「いじめを見て見ぬふりをする人」「いじめをはやし立てる人」、いずれも出さないための討論を行った。私は「いじめを見て見ぬふりをする人」Ⅱ「傍観者」がいじめに間接的に加担している、ということに初めて気づかされた。

この話し合いでのいじめの具体的な防止策としては、「相手の気持ちを考えて行動する」という意見や、「気がかりなことは友達や大人など話せる人に相談する」などの意見が出た。話し合いの結論としては、正統派な答えだと思う。しかし、それができないからこんなにも大勢の若者が命を絶つまでに追い込まれてしまうのだと思う。その後、地域の大人の方々と交えて、意見交換の場が設けられた。ある大人の方から「他人事だと

思っていないか」という意見を頂いた。正直、自分の心の中には気づかされるものがあつた。自分を含め、周りの友人達を考えてみても、実際にいじめと見えないものを見たことがないのだ。いや、気づいていないのかも知れない。そのため、他人事になってしまっている部分はないだろうか。

私は他人事になってその解決策を考えるべきだと思った。

年間三二〇の自殺者数の内、三分の二が男子であるということが分かった。きっと、男子は強がつて誰にも打ち明ける事が出来ないのだろう。どうしたら話しやすい環境を作れるのだろうか。私は自分自身がいじめられたらどうするだろうか、考えてみた。

もし、自分だったらやはり一人で抱え込んでしまうかもしれない。でも自ら命を絶つ、という選択に至るまでにはいかないだろう。ぎりぎりの所で、誰かに悩みを打ち明ける、という選択をすと思う。

悩みを打ち明けられる場所、人があれば、悲しい選択を少しでも防げるのではないだろうか。気がかりな事は誰かに相談する、という事自体が難しいことであるため、定期的にカウンセラーなどの第三者による面談を行ってはどうか。第三者だから話せるという事もあると思う。カウンセラーに自分から足を運ぶ、という事がとても勇気のいる事だと思うので、定期的な面談などにより、自動的に自分に順番が回ってきた場合、話しやすくなるのではないかと考えた。私の中学校には、毎週一回カウンセラーが来ている。今のところまだ利用した事がない。今後、身の周りで気がかりなことがあれば、勇気を出してカウンセラーに相談しようと思う。そうした一人一人の第一歩が、いじめ解決の第一歩となると信じたい。

また、いじめを軽く考えてはいけない。私たちの認識内では「いじめは悪い事」というイメージに過ぎない。しかし、いじめは立派な犯罪である。事実、いじめについての法律が作られている。知っている人は少な

いかもしれないが、「いじめ防止対策推進法」という法律が存在する。そのため、いじめというものをただ「悪い事」という甘い認識ではなく、犯罪であるという認識を一人一人が持つ必要がある、他人事にしてはいけない。誰しも、空き巣に入られた場合、「被害届」を出すだろう。いじめが犯罪だということは、そういう認識が必要だという事だ。

私はいじめを目撃したら、勇気をもって第一歩を踏み出したいと思う。「人の勇気」によっていじめを減らすことはできると考える。

いじめを減らすためにあなたはどうしますか。

更生という言葉

横浜市立六ツ川中学校 三年

北^{きた}尾^お隼^{はや}都^と

僕の伯母は、都内の少年院で外部講師をしている。

ある年のクリスマスに、叔母が中華料理店に行ったら、注文していない料理が出てきたそうさ。伯母が

「あのう、これ注文していないんですけど。」

とたずねたら、奥から一人の青年が出てきて

「僕の作った料理を食べてもらいたかったんです。」

と、ニコニコしていたという。伯母は、

「少年院を出て、更生した子だったよ。びっくりしたよ。クリスマスツリーも、自分で飾りつけたんだって。」と話してくれた。

その時僕は、伯母から、更生という字は、「更正」ではなく、「更生」と書くのだと教わった。その時僕は、更生は正すのではなく生まれなおすのだなと思った。

伯母は、ガソリンスタンドでも、店員さんから

「あの、もしかして。」

と話しかけられ、

「お世話になりました。」

と、お礼を言われたことがあるそう。こういう再会は、めったにないそうだが、中には号泣しながら、更生したことを語ってくれた青年もいたそう。

伯母は、ある企業で支店長になっている青年のことが、一番心に残っているという。

「支店長になりました。妻も、小さな子供もいます。」

「立派になったね。がんばったね。」

と伯母がほめたら、その青年はポロポロと涙を流して、こう語ったそう。

「出院した後、就職した会社では、少年院出だつて、密告したヤツがいて、クビになりました。その後、流れていったところで、今の社長に拾われました。」

俺は、少年院でいい先生に出会いました。運動会の時、院生代表の言葉を俺に任せてくれました。たくさん院生の中から選んでくれました。先生が俺に任せてくれたことが、うれしくて。先生が俺に任せてくれたことが、今の俺を支えてるんです。辛いことや、苦しいことがあつても、だからがんばつてこれました。先生に会うことがあつたら、元気に働いている。ありがとうございましたと伝えて下さい。」

伯母は、こんな話もしてくれた。伯母が更生中の少女たちに

「私は、出院した方たちのことをよく思い出しますよ。」

と言つたら、一人の少女が手を挙げて

「私のことも思い出してください。私のことも忘れないでください。」

と言ったという。

自分は一人ではない、応援してくれる人がいると感じられて、人は更生するのだと、僕は思った。

僕にも伯母のような存在がいるのだと思う。それは両親であったり、担任の先生であったり、周囲の友人たちであったりすると思う。普段はそれほど意識してはいないけれど、気づかない所で支えられているのだ。

声に出して言うのは恥ずかしいけれど、そのことに感謝しながら、僕も誰かを応援できるような人になりたいと思う。

見えない「努力」

横浜市立日吉台中学校 二年

栗屋遥

「お前、障害者かよ。」

私はいままで、「障害者」という言葉を、友達どうしで言いあいながら笑っている人を何度も見たことがあります。そのとき、周りの人はその一言で大笑いし、障害者だ、障害者だとばかりにしました。

私の母は聴覚障害者です。難聴の程度は、軽度、中等度、高度、重度に分けられていて、母は全く音が聞こえないほどの重度難聴です。音が全く聞こえないので、当然、私の声もよく分からず、補聴器から聞きとった音で私の声を想像しています。補聴器は周囲の音を拡大して耳に伝える、スピーカーを小さくしたようなものです。周囲の音を全てひろってしまっているので、完全に声はつきり聞こえるようになるものではありません。母はこの補聴器を使うことと、話している相手の口の動きを読みとることで会話することができます。

私と母が会話しているのを見ていた友達に母は聴覚障害者だと伝えると、みんな驚きます。それは、母が私や姉妹や身のまわりのお世話になっていてる人に迷惑をかけないように「努力」をしてくれているからです。

母は、話す相手には必ず、自分の耳が不自由だということを伝え、医者にはマスクをはずして話してほしいとおねがいでいます。聞きとれないことがあったら、何度も聞き返し、言っていることを理解しようとして

くれます。私は母と互いの姿が見えない所で会話ができないということ以外は苦勞していません。みんなのお母さん方と違う点は、特にないと思います。母が私達には気付かないような、小さな見えない「努力」をしているから私はこのような考えをもてたのだなと思いました。私が母と手話を使わずに会話することができるとは、小さいころから日常的に手話を使っていると、周りに友達ができたときに手話を使ってしまう、なじむことができなくなるかもしれないから、なるべく口で会話できるようにという母の努力のおかげです。

普段、母はそんなに自分のことは話さないもので、今回の人権作文をきっかけにして、私は、生活の中で困ること、一番うれしかったこと、私たちにやってもらいたいことの三つをきいてみました。

生活の中で困るのは、どこから音がでているのか分からないことだそうです。後ろから声をかけられたり、電車のアナウンスがよく分からず、戸惑うことがよくあると言っていました。母は目で誰がしゃべっているか、どこから音がでているかを判断しています。

一番うれしかったことは、自分が理解できるようにしてもらえたことだそうです。スマホに文字を打つてくれたり、紙に書いてくれたり、手話で話してくれたり、なんとか伝えようとしてくれたり、目から言葉を読みとれるようにしてもらえると、とてもうれしかったです。

私たちにやってもらいたいことは、手話ができなくても文字を書いたりしてほしいことと、聴覚障害者の人に偏見をもたないでほしいということです。口で何回も説明をされるよりも、文字を目にみえるようにしてもらえる方が助かるそうです。聴覚障害の人は、うまくしゃべることができないから、関わりたくないなどと思わないで下さい。私は、聴覚障害者の母の友達と一緒に遊んだことがあり何度かききとれないこともありましたが、文を紙に書いてくれたり、ジェスチャーしてくれたり、とてもおもしろく優しい人でした。見た目や偏

見でその人を判断するのは、自分にとってとても損することだと思いました。

私は今年のはじめから少しずつ母に手話を教えてもらって日常会話に取り入れるようにしています。父も手話を使えるので、私と姉と妹が手話を習得できれば、家族五人で手話を使って会話できて、母の負担を減らせると思ったのがきっかけでした。高校を卒業するまでにある程度できれば、妹の学校の説明会などで通訳さんにたよらなくてすむので、早めに習得したいです。

世界にはいろんな障害をもっている人がいて、その人たちは私達に負担をかけないように、人一倍の苦勞をしながら、人一倍の「努力」をしていています。障害をもっている人が住みやすい場所にするためには、私達が障害の人への理解を深めることが大切です。私達はこんなに気をつかってもらっているのに、人をばかにするのに「障害者」という言葉を使うのは、とてもおかしいと思います。今後の人生で、あなたも障害をもつかもしれません。「障害者」とばかにした人達、今、だれかに向って「障害者」とばかにすることはできますか？

つながりの大切さ

横浜市立あざみ野中学校 二年

佐藤優人

今回僕は、人と人とのつながりの大切さについて書こうと思います。

人権とは、人間が生まれたときからもっている、自由、平等、生存など人間としての権利と辞書に書いてあります。

僕には、障害をもった弟がいます。

僕の弟の障害は、生まれたときに分かっていたわけではありません。昨年五月に、弟が学校に行かなくなり、どうして行かなくなったのかを聞いても分からず、毎日両親が学校へ一緒に行く日々が続きました。両親は共働きなので、毎日付き添うのに疲れてしまい、療育センターに、相談しに行ったようです。それによって、弟の障害（自閉症スペクトラム）であることが分かりました。

僕の弟は、その障害をもっていることで、困っていても自分の意見を伝えられず、もつと困ってしまいました。また、言葉や話などの見えないものよりも、物や、文字などの見える物のほうが、分かりやすいなど変わったところがあります。僕の弟は、見た目だけでは分からない障害をもっていて弟がバニックをおこしたときに周りの人は、ビックリすることがあります。ただのワガママなのか、障害をもっているのかは、理解されにく

いのです。

僕たち家族はそれを知ることによって、弟に対して、困っていないか確認したり、分かりやすい言葉にしたり、困ったり分からないことがあったりすれば、聞くようにしたりと、本人の気持ちを考えた対応をする生活に変わりました。

僕の両親は、僕達にもっと弟の障害について分かってもらうために、本を買ってきました。そのため家では、弟が物や文字を目で見えて分かりやすいようにと、ホワイトボードに絵や文字を使ったマグネットをはれるものを父が作りました。それを使うことによって弟は物事が分かりやすくなり、今までできなかった素直に感情を表に出すことができるようになり、一人で困る事がなくなりました。

僕は、そんな弟を見て、素直に「ヤダ」、「大好き。」と言えることを尊敬しています。たった一言だと思うかもしれませんが、とても勇気のいる一言だと思います。僕は我慢してしまったり恥ずかしくて言えないことを弟は言えるのです。

僕は、今回のことから、障害をもった人でも、一人一人の個性をのばしたり、いいところを尊重することによって、今よりも生活しやすくなるのではないかと思います。

また、障害のない僕達の間であつたとしても、サポートや手伝うことで、人が人を大事にする事につながり、もっと自分らしく生きられるのではないかと思います。

僕は、障害のある人もない人もそれも個性だと思うので同じように関わりをもっていきたいと思います。人が人を大事にし、自分らしく生きられる環境をつくる事で偏見や差別はなくなるのではないのでしょうか。

私達に一番必要な事

横浜市立山内中学校 一年

ソボレフ 眞^ま絢^や

私は、小さい頃から「ハーフ」という肩書きだけで一部の男子から、からかわれていた。父はロシア人で、母は日本人だ。

少しでも北方領土についてのニュースがとりあげられると、「北方領土返せ!」「どうにかしろよ!」と口々に言われた。その時はどうする事もできず、「無理だよ…」と笑ってごまかしていたけれど、本当はただだから知っているだけなんだと分かってはいたのに、すごく辛かった。時々感情が抑えられず、だれもいないところで泣いていることも少しあった。

私は一時期自分の事を一番許せない事があった。それは、私をからかってくる男子よりも先に、両親の事を恨んでしまったことだ。いつも笑顔で帰りを待っていてくれる母に対して、ひどい言葉をかけてしまったことがあった。今でも思い出す度に、私はすごく後悔している。

「日本人に産まれたかった。」「何で私の髪は茶色なの?何で黒じゃないの?」

私が言い過ぎたと気づいた時には、母は半泣きの顔で私を見ていた。それと同じくらいに父にもすごく申し訳のなさでいっぱいだった。

世の中には、私以外にも悩んだり苦しんでいる人が沢山いると思う。だから私は、自分みたいに苦しんでいる人を一人でも減らしたい。

他の子にとっては、大した事ではないのかもしれない。でもそれは、本人にとって気にしている事であったり、コンプレックスであったりすることもある。身長のことであったり、名前のことであったりと、可能性は数えきれない程無限にあると思う。そしてだれも傷つけないように気をつけるのはすごく難しいことだ。自分ではどうすることもできないことを言われると、「他の子と違うのか」と思い、自分だけ置いていかれるように感じてしまう。

この世界から、嫌な言葉をなくすことはできないのかもしれない。しかし、男女問わずクラスだけでも「誰かを傷つける言葉」をなくしたい。みんな一人一人の価値観が違うだけで、みんな全ての人が平等だと思う。だれか一人でも仲間外れになっていることは絶対にさげたいことだし、あつてはいけないと思う。だから、外見や先人観でだれかを苦手と判断するのはよくないと思う。

私はたくさん話して相手をよく知り、なにか物を言う前に、相手が傷つかないか、気にしていることではないのかをよく考える事が今中学生の私達には一番必要なのではないかと思う。

一人一人が気をつけることによって、この世界から「いじめ」や「差別」をなくすことにつながると思う。傷つけないように気をつける価値は絶対にあると思う。

気付いた先に見えるもの

横浜市立大正中学校 一年

西^{にし}村^{むら}実^み祈^{のり}

この世で私たちが生きていくために必要なものはたくさんある。毎日の生活に必要なもの、人と関わるために必要なもの、自分の好きなことを成しとげるために必要なもの。それ以外にも、もつとたくさんあるだろう。

それならば、この世で私たちが生きていくために必要のないものは何だろう？…必要のないもの？必要のないものなんてあるのだろうか。私は考えた。けれど、この時の私はその答えを導き出すことは出来なかった。

ある日、私はいつもと同じようにバス停に立ちバスを待っていた。一週間に一度の習い事の場所まで向かうのに私は毎回バスを使っている。まだバスは来ていない。(今日はおくれてるな…間に合うかな…) そんなことを考えながら、何度も時計を確認していた。八分、九分、十分と過ぎていくうちに、私の気持ちはあせっていき、時計を見ずにはいられなかった。

予定時刻を十五分くらい過ぎた時、やっと私が乗るバスが来た。バスの中はそれほど混んでいない。なのになぜそんなにおくれたのか。バスに乗ってまず目に入ったのは、車いすに乗って足が固定されている男性だった。どうやら足が不自由らしい。十五分もバスがおくれたので、習い事が始まる時間はギリギリにせまっていた。

た。(なぜ車いすの人がバスに乗るんだろう…車か何か他の交通手段を使えばいいのに…) 私はそう思いながら座席に着いた。その思いが相手の男性をどれだけ傷付けているかも知らずに。

次のバス停には五、六人の人が並んでいた。車内に入る時、みんなが少し困ったようなめいわくそうな顔をしているのが見えた。きっと私と同じようなことを考えているのだろう。(なぜ車いすの人が…こんなにバスがおくれて…もう時間がないのに…)と。すると、後ろの席の方から「チツチツ」という誰かが舌打ちする音が聞こえた。車いすの人は聞こえなかったのか、聞こえなかったふりをしたのかは分からないが、顔色一つ変わらなかった。

私がおりる二つ前のバス停で、車いすの男性はおりようとしていた。(足が不自由なのにどうやって段差をおりるんだろう?) そのバス停に着いても、車いすの男性は動かない。代わりに運転手の人が座席からおり、出口の段差に何かを取りつけようとしていた。それはスロープで、坂をつくっていたのだ。やつとスロープが取りつけ終わり、車いすの男性が動こうとしたその時、後ろの方から声がした。その声は小さいけれど、はっきり聞こえる声だった。「おせーんだよ。車いすはバスに乗ったらいけねーんだよ。」そのするどい言葉を聞いた車いすの男性の背中が小さくなりしよんぼりしているように見えた。

最初は、「この人のせいでバスがおくれたんだ。」などと思っていた私だけれど、この姿を見た時、私は車いすの男性がどれだけ傷付いていたかということが分かり、かわいそうだと思った。

一番最初に私が疑問に思ったこと。それはこの世に必要なものはあるのか。その答えがこの時、私にははっきり分かったような気がする。それは人を傷つける言葉や行為だと思う。『車いすの人がバスに乗ってはいけない』などという決まりはない。車いすの男性も不自由な体を持ちたくて持っているわけではない。そう

考えた時に、私がバスに乗ろうとした時に考えていたことを思い出すと、こんなことも分からなかった自分がとてもはずかしく、とてもおろかだったと思う。

もし自分が車いすの男性と同じ立場だったらと考えると舌打ちをされたらとても傷ついていただろう。

私は習い事の始まる時間に間に合うことはできなかった。けれど、自分にとっても大切なことを学ぶことができた時間だったと思う。

この世には必要なものがたくさんある。けれど必要ではないものもある。不自由な体を持った人達を受け入れることのできる広い心を持ち、困っている人がいたら進んで助けることのできる人になりたい。またそんな人達がこの世にもっとたくさん増え、だれもが平等に暮らすことのできる社会ができることを願うのと同時に、だれもが安心して暮らすことのできる社会になってほしい。

誰もが気持ちよく過ごせる環境

横浜市立老松中学校 一年

本田愛果

私の姉は小さいときから重い障害をもっています。そのため私は、姉ができないことや困っていることは母と一緒に手伝っています。小さいころ私は、姉の障害は治ると思っていました。しかし小学生の時、母から姉の障害は病気とは違い一生治らないと言われました。その時正直ショックでしたが、姉が気持ちよく過ごせるように考えようと思いました。

姉は、滑脳症かっのうししょうという障害です。滑脳症とは脳にあるはずのシワが、ほとんどない障害です。これは脳の未発達によるもので、運動機能の低下や知的発達の遅れ、さらにてんかんや肺炎になりやすく、合併症がっぺいしょうの危険性もあります。そのため姉は、一日に一回ほどの頻度ひんどで発作があり、毎日の食事やお風呂などのほとんどを私たち家族が行います。少し大変ですが、それが私たちの日常です。

そして小学生になった姉は、特別支援学校という、障害があり特別な支援を要する児童・生徒・学生を対象とした学校に通うことになりました。それと同時に、一年生から六年生まで副学籍交流といって、近くの小学校にも時々通ってみると一緒に過ごしました。その時姉は車いすなので階段があるのがとても大変でしたが、先生方が手伝ってくれたり、不自由なところは助けてもらっていました。中には、同級生の子たちも一緒に

に手伝ってくれたそうです。そのような支えがあつてこそ副学籍交流はできますが、目的として地域との関係をより深めるだけでなく、姉が少しでも社会で自立できる力を育むということがあります。そのため「できることは自分で挑戦し、一人では難しいところはみんなに助けをもらおう。」ということです。

私は、このように障害のある子どもたちと交流をして、お互いに学ぶということはとても大切なことだと思います。なぜなら、まだ障害者がいるということ知らず、みんな普通に一人で生きていける人ばかりだと思こんでいる人も少なくないと思うからです。私はより多くの人に姉のような障害者について知ってもらい、また学んでほしいなと思います。一緒に交流する中で、かわいそうと思う人がいるかもしれないがそうではありません。姉は姉なりに一日一日を一生懸命生きています。かわいそうだからすべてやってあげたいと思う気持ちは分かりますが、そうではなくみんなと一緒に気持ちよく過ごせるようにするために少し手助けをしてあげるのが良いと思います。

このように、私は健常者と障害者が一緒に過ごしていく中で、健常者は障害者の手助けをして、できるだけ自立できるような環境をつくれたら一番良いと思います。

互いを尊重する社会

横浜市立義務教育学校霧が丘学園 八年

三橋堇令

「うわー。気持ち悪い顔!」「なんだよあれー。すげー化けものじゃん!。」

これは、私の父が中学生の時に毎日毎日同級生から繰り返し言われた言葉だそうだ。私はこのことを初めて聞いた時、耳をふさぎたくなった。でも、その言葉の一つ一つが耳に残り、消えなかった。

同じ人間であるのに、笑いにされてしまう。そして、まるで化けものように扱われていた過去。

私の父は、口唇口蓋裂という先天性の奇形で生まれた。そのため、私の祖母が親戚の人達から責められたこと。父を守るために引越しをしたこと。また、複数回の手術を受けたり、歯列矯正をしたりと、通院を余儀なくされて大変だったことは聞いた事があった。

言葉が出なかった。父の顔が他の人と変わりないと思っていた。確かに父の口周囲をじっくり見ると、何度も行われた手術の痕があった。鼻筋を治すための手術や顎にはボルトも入っていることや顎の手術のために歯が少なくなったことも知った。手術を繰り返しても上顎に小さな穴があり、鼻に抜けてしまうので、発音もこもったような声だし、風船も膨らませることができない。しかし、手術の跡はきれいで、気持ち悪い顔ではない。化けものでもない。声もおかしな声でもなければ聞き取りづらく困ったこともない。

中学生の父の姿を想像した。私達の中学は全学年とても仲が良い。ふざけることはあったとしても、言われて傷つく言葉を言う人は誰もいない。なのに、周囲はなぜ止めなかったのだろう。先生や大人は、どうしていたのだろう。それと同時に、父は強い人だと思った。もしも私が同じ立場だったら、学校になんか行きたくなくて不登校になってしまっているかもしれない。毎日泣いて過ごしているかもしれない。心を閉ざしているかもしれない。

口唇口蓋裂とは、様々な症状があるが、上唇や上あごに割れがみられる生まれつきの病気だ。先天異常の中でも多く、医学が進歩した現在でも原因はいまだ正確に説明されていない。だが、五百人に一人の割合で発症すると言われている。このことから決してめずらしい症状ではないが、顔のことだからなのか未だに社会に受け入れられていない現状があると考える。外見による偏見や差別があるのではないだろうか。

「障がい者はいなくなった方がいいんだ。」という全く間違った独善的な発想により、十九名のかげがえのない命が奪われた津久井やまゆり園事件から二年が経つ。あの悲しい事件で障がい者に対しての偏見が全くなかったという、そうではない。「人は外見で決めちゃだめ。」「相手の立場に立って考えよう。」と当たり前のように教えられてきた。これからも道徳などで、そう教えられていくのだろうかと思うが、障がい者に対しては、どこかオブラートに包まれているのだろうかと感じる。病気や障がいなど知らないことだらけだけど、これから偏見や差別がない社会にするためには、一人ひとりをもっと知らなければいけないのだ。そうすれば、誰もがふざけたり、指を指して笑うことなく、互いを尊重する社会ができるのではないのだろうか。私はそう強く強く考える。いつか障がい者に対して偏見や差別がなくなるまで。

気付く

横浜市立上郷中学校 三年

森^{もり} 咲^さ 月^{つき}

「もう、慣れたよ。」その言葉を聞いて、私は自分の不甲斐なさを感じた。私は今までいじめは自分に関係ないことだと思っていた。

私が中学三年生になった頃、これから受験生だから、一日一日を意義のある毎日にし、後悔のないような一年にしよう、そう、意気込んでいた。けれど一、二カ月経ったある日クラスの人が悪口を言っていた。それを聞いたとき私は、もしかしたら自分のことを言っているんじゃないか、一体誰のことを言っているのだろう。そんな事ばかり考えてしまつて、とても恐く、不安な気持ちに襲われた。私は実感したのだ、悪口を言われることでどれだけ心が傷つき、どうしようもなく真つ暗な気持ちになることを。

そしてその数日後、クラスの人が集まつて悪口を言っていた相手が見つかった。けれど私は何もすることが出ずに、過ぎていく日々。先生にも相談しなくちゃ、と思つても、言ったことがばれたら次言われるのは私になるのではないかという気持ちがいよいよ行動出来ない現状。勇気を出して、悪口を言われた子に話を聞いてみると、

「もう、慣れたよ。二年生のときからだし。」と言われ、なぜ自分もつと早く気づけなかったのだろう、ど

れほどつらい気持ちをして学校に来ていたのだろう、と後悔ばかり。そのことから、壁を突き破り、一歩踏み出すことの大切さ、周りの変化に素早く気づき行動することの必要性を感じた。

嫌なことがあつたら気軽に相談できる、そんな人に私はなりたいと思う。ほんの些細な事でもいい、不安な気持ちを少しでも無くせたら楽になるかもしれないから。そして、相談されることで、素早く気づきいち早く行動出来、解決策も考えることが出来るから。

また、他人の長所や頑張っていることをたくさん見付けたい。そもそも、なぜ悪口を言うのか、考えてみると他人の気持ちを考えようともせず、ただ気に入らないだけや、他にも嫉妬、嫌悪感、相手より自分が優位に立ちたいから、など理由は様々だと思う。短所や何か悪いことばかりを見付けようとせず、長所を見付けそして認めることが出来れば、悪口もなくなり、自分も、「また良い所を見付けられた。」と嬉しい気持ちになり、一石二鳥だ。こんな良いことはないだろう。

だから私は思う。人の長所をたくさん見付け、そして、誰かの支えになれるような人になりたい。

参加校紹介(139校)

■横浜市立 〔鶴見区〕

市 鶴見中学校
末 吉中学校
鶴 尾見中学校
寺 尾見中学校
生 麦尾中学校
矢 向中学校
上の宮中学校
横浜サイエンスフロンティア
高等学校附属中学校

〔神奈川区〕

浦島丘中学校
栗田谷中学校
六角橋中学校
神奈川中学校
松本中学校
錦台中学校
菅田中学校
盲特別支援学校
老松中学校
岡野中学校
軽井沢中学校

〔中区〕

港沢中学校

〔南区〕

大 鳥尾中学校
仲 尾台中学校
本 牧中学校
横 進田中学校
共 進田中学校
平 楽田中学校
蒨 田中学校
永 南田中学校
六 ツ川中学校
藤 の木中学校
港 南中学校
笹 下中学校
野 庭中学校
港南台第一中学校
芹 が谷中学校
日 限山中学校
日 野南中学校
東 永谷中学校
南高等学校附属中学校
岩 崎中学校
保 土ヶ谷中学校
宮 田中学校
岩 井原中学校

〔港南区〕

〔保土ヶ谷区〕

岩 崎中学校
保 土ヶ谷中学校
宮 田中学校
岩 井原中学校

〔旭区〕

西 菅田中学校
上 菅田中学校
新 井田中学校
鶴 ヶ原中学校
万 騎が原中学校
希望が丘中学校
上 白根中学校
左 近山中学校
南 希望が丘中学校
今 宿中学校
本 宿中学校
若 葉台中学校
旭 北中学校
岡 浜村中学校
汐 見台中学校
洋光台第二中学校
金 森中学校
六 浦中学校
大 道中学校
西 柴中学校
富 岡中学校

〔磯子区〕

富 岡中学校
西 柴中学校
大 道中学校
六 浦中学校
金 森中学校
洋光台第二中学校
汐 見台中学校
岡 浜村中学校
旭 北中学校
若 葉台中学校
本 宿中学校
今 宿中学校
南 希望が丘中学校
左 近山中学校
上 白根中学校
希望が丘中学校
万 騎が原中学校
鶴 ヶ原中学校
新 井田中学校
上 菅田中学校
西 菅田中学校

〔金沢区〕

富 岡中学校
西 柴中学校
大 道中学校
六 浦中学校
金 森中学校
洋光台第二中学校
汐 見台中学校
岡 浜村中学校
旭 北中学校
若 葉台中学校
本 宿中学校
今 宿中学校
南 希望が丘中学校
左 近山中学校
上 白根中学校
希望が丘中学校
万 騎が原中学校
鶴 ヶ原中学校
新 井田中学校
上 菅田中学校
西 菅田中学校

〔港北区〕

富岡東中学校
西金沢学園 中学部
並木中学校
釜利谷中学校
小田中学校
城郷中学校
新田中学校
日吉台 中学校
大綱 中学校
篠原 中学校
樽町 中学校
日吉台西 中学校
新羽 中学校
高田 中学校
田奈 中学校
中山 中学校
十日市場 中学校
鴨居 中学校
霧が丘学園 中学部
東鴨居 中学校
山内 中学校
谷本 中学校
青葉台 中学校
みたけ台 中学校

〔都筑区〕

美しが丘 中学校
すすき野 中学校
奈良 中学校
緑が丘 中学校
もえぎ野 中学校
あぞみ野 中学校
鴨志田 中学校
市ヶ尾 中学校
あかね台 中学校
都田 中学校
川和 中学校
川崎 中学校
茅ヶ崎 中学校
荏田 中学校
中山 中学校
東山 中学校
早瀬 中学校
大塚 中学校
戸塚 中学校
舞岡 中学校
境木 中学校
豊田 中学校
汲沢 中学校
名瀬 中学校

〔栄区〕

深谷 中学校
秋葉 中学校
南戸塚 中学校
本郷 中学校
上郷 中学校
桂郷 中学校
西本郷 中学校
飯島 中学校
小島 中学校
岡津 中学校
中和 中学校
泉が丘 中学校
上飯田 中学校
いずみ野 中学校
領家 中学校
瀬谷 中学校
南原 中学校
東瀬谷 中学校
下瀬谷 中学校

〔瀬谷区〕

■その他

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校
横浜雙葉中学校

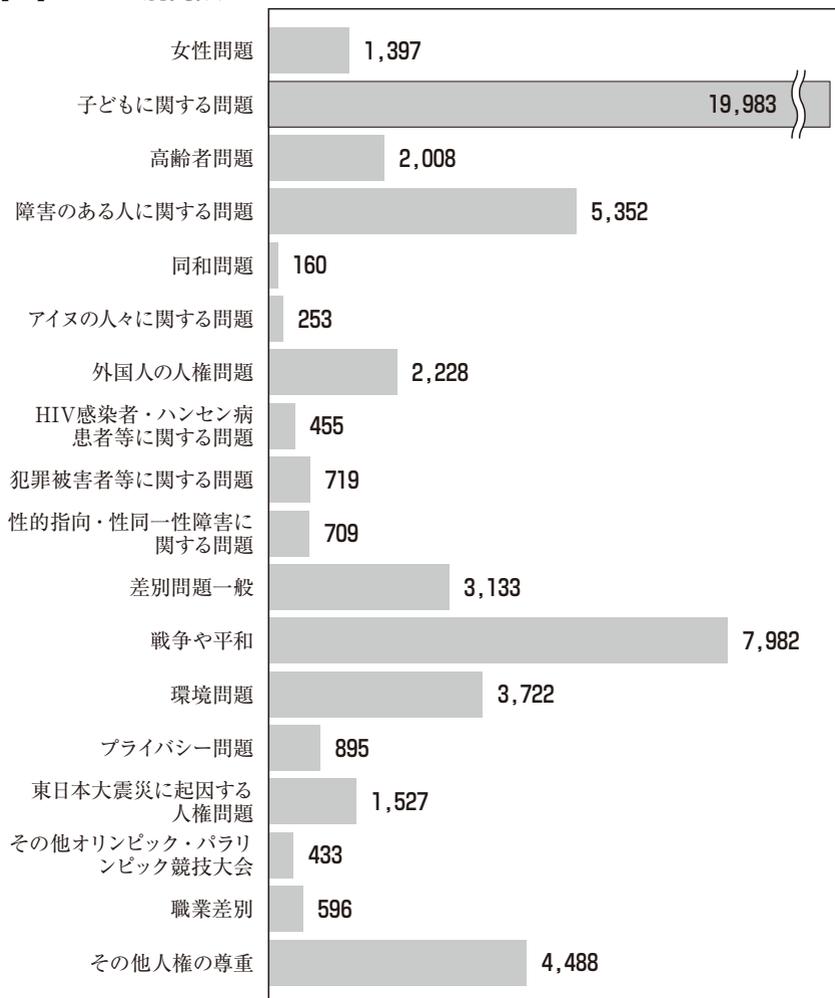
ご協力ありがとうございました。

● 応募状況

【1】 推 移

年 度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
応募校数	143	141	143	144	140	139	139
作 品 数	55,824	58,016	58,487	60,721	60,209	59,193	56,040

【2】 テーマ別内訳



●平成30年度全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会

〈第一次審査員〉

横浜市立中学校教育研究会国語科部会 23名

〈第二次審査員〉

横浜市教育委員会事務局指導主事 10名

〈最終審査員〉

横浜人権擁護委員協議会会長	小林	千恵子
横浜市人権擁護委員会第一ブロック委員	石川	綾乃
横浜市人権擁護委員会第二ブロック委員	武井	康一
横浜市人権擁護委員会第三ブロック委員	天野	信夫
児童文学作家	吉富	多美
横浜市PTA連絡協議会会長	海上	良太
横浜市立中学校人権教育推進協議会会長	安藤	秀朗
教育委員会事務局人権健康教育部長	前田	崇司
市民局人権担当理事	徳江	雅彦

●協賛

横浜DeNAベイスターズ

横浜F・マリノス

横浜FC

横浜ビー・コルセアーズ

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市内における人権啓発活動を、関係機関の協力のもとに総合的かつ効果的に推進するために平成12年9月に設立。

構成：横浜市・横浜人権擁護委員協議会・

横浜市人権擁護委員会・横浜地方事務局

平成30年度
全国中学生人権作文コンテスト
横浜市大会作文集

平成30年11月

横浜市市民局人権課 TEL 045(671)2379

横浜市教育委員会事務局

人権教育・児童生徒課 TEL 045(671)3724